様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １９ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３７０３４８

研究課題名（和文）文学に見る理想の「ローマ人」像

研究課題名（英文）The 'Romans' Idealized in Literature

研究代表者
高橋　宏幸（Takahashi, Hiroyuki）

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：３０１８８０４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：共和政末期からアウグストゥス帝の治世にかけて現われてくる「ローマ人」像をめぐって、ラテン文学作品を中心とする関連文献を検討した。主要成果はつぎのとおり。①カエサル関連著作、すなわち、『ガリア戦記』『内乱記』『アレクサンドリア戦記』『アフリカ戦記』『ヒスパーニア戦記』の邦訳注解の出版。②ウェルギリウス『アエネーイス』に関し、「葬礼」のモチーフや、ユートゥルナの役割と機能をめぐる新たな解釈の提起。③カエサルの著作中に示された戦争と関わる噂のさまざまな働きをウェルギリウスとオウィディウスが各々の「噂」の描写に生かした独自の表現についての観察と解釈。④ホラーティウス『書簡詩』の邦訳注解の完成。

研究成果の概要（英文）：Focusing on the idealization of the Romans as the legitimate ruler of the world appearing in Latin writings from the late republic towards the early principate, this study took a close look at the relevant texts. Publications are: the translations with annotations and an introduction of Caesar’s Gallic War and Civil War, and anonymous Alexandrian War, African War, and Hispanic War, articles on Vergil's Aeneid, which discussed the motif of funeral honor and Juturna's role and functions in the epic, and an article on the descriptions of Rumor by Vergil and Ovid incorporating the presentations of rumor as a key factor on various fronts of war in Caesar's writings. In addition a translation with annotations and an introduction of Horace's Epistles has been completed.

研究分野：西洋古典学

キーワード：西洋古典　ラテン文学　ローマ人

## １．研究開始当初の背景

本研究の着想は拙著『カエサル『ガリア戦記』歴史を刻む剣とペン』（岩波書店 2009）執筆過程で、次のような認識を得たことに発した。すなわち、第一に、共和政末期に高まったラテン語による本格的な歴史著作への期待にこの作品が十分応える内容を備えていたこと、第二に、そこに示される戦争観、運命観、理想的指導者像、統治の理念と現実認識といった点において、ウェルギリウス『アエネーイス』と多くの対応を有すること、である。つまり、『ガリア戦記』にはラテン文学が「ローマ人」を表現する画期的な一歩が認められるとともに、その歩みは共和政から元首政へという国家体制の大きな変革を越え、世界史の中にも稀有な天才政治家・軍人からローマ最高の詩人へと継承されていると見られ、そこから、そうした大きな流れの中に「ローマ人」像を捉える試みが構想された。

この試みのために平成 22～24 年度の科学研究費補助金が交付され、「危機の克服」と「多様な才能」を重要な視点として「ローマ人」像の形成過程が検討された。その結果、『ガリア戦記』から『アエネーイス』へという大きな流れをテキストに即して明確に示したと確信できるだけの成果を上げた。しかし、こうして形成過程が跡づけられた一方で、「ローマ人」像がこれら両作品、あるいはカエサルとウェルギリウスのみを取り上げて論じ尽くせるものでないことは言うまでもなく、これまでの成果を踏まえて、ローマ共和政末期から元首政初期に形成された理想的「ローマ人」像について、より広範囲に、また、作家ごとの表現の特色に注意を払いながら明らかにすることを次の課題として本研究は出発した。

## ２．研究の目的

本課題は、共和政末期からアウグストゥス帝の治世にかけて現われてくる「ローマ人」像について、ラテン文学作品を中心とする関連文献を検討し、①その諸相を析出すること、②支柱をなす理念を把握すること、そして、③形成された理想の「ローマ人」を各作家が提示する表現手法を明らかにすること、以上を研究目的とした。

アウグストゥス帝の治世はラテン文学史上、黄金時代と呼ばれて諸作品の質量ともにもっとも隆盛を誇った時期と重なる。そこには必然性がある。アウグストゥスの手で長い内乱が終息するまで、ローマは、一時は舅と婿の関係にあったカエサルとポンペイウスの衝突に象徴されるように、姻戚縁故の紐帯をも断ち、同胞同士で流血の闘争を続け、自国の領土を疲弊させた。そのような自己破壊的な愚行は、ローマが地中海世界に覇権を確立し、西はガリアからブリテン島へ、東はシリアからメソポタミア地域へと版図拡大の足をさらに伸ばそうとしていたときだけにいっそう強く嘆かれることとなった。黄金時代のラテン文学の活力はこのヨーロッパ世界全体を巻き込んだ混乱期における詩人、著作家たちの体験に発している。一方に、損失への悔恨、犠牲者への哀悼、暴力への憤激、戦争への嫌悪、他方に、窮地を救った人士への感謝、新体制への期待、復興と平和持続への祈念、といった思いに動かされながら、そもそもこのような愚行と混乱の原因がどこにあったか、同じ過ちを繰り返さないためにはどうすべきかを問い、その答えの模索の中でそれぞれの信じる生き方を表現することが文学的営為の中核を占めた。そうした営為から理想を求めて形成された「ローマ人」像が本研究の考察対象である。

## ３．研究の方法

共和政から元首政へという時代の激変期にあっては、旧態の破壊と新体制への再構築という状況が現われることから、そうした動

的様態を把握するために、戦争と平和、自由と隷従、文明・文化と未開・野蛮、敬神と不遜、幸運と悲運、信義と欺瞞、といった対立項を軸として検討する一方、これに向き合う側において、政治家や軍人、弁論家、法律家など直接的に国政に関わる地位、また、農民や兵士など国家の基盤として意識された職業の他、著作家自身、とくに詩人たちが国家の中で自分たちの担うべき役割をどのように提起し、表現しているかに注目して考察した。これらの作業をテキストに即して行なうことにより、本研究は一方に「ローマ人」像の多様な側面を、他方に全体を統合して根幹をなす理念を浮き彫りにするとともに、それらが各作家によってどのように作品に取り込まれているか明らかにすることを目指した。

このために本研究は、①原典テキストの注解（および未邦訳のものについては邦訳）、②関連テキストをカエサルからウェルギリウスへという流れの上に置いて検討・整理し、「ローマ人」像の諸側面を析出すること、③②で得られた「ローマ人」像の個別的側面それぞれから対応点、共通要素を拾い上げると同時に、系統づけを行ない、総合的知見を得ること、④ この知見をまた個別のテキストにフィードバックし、それぞれの作家について「ローマ人」像の提起・表現の特色を観察すること、また、⑤関係作品の文脈をより深く理解するためにとくに必要と思われるようなゆかりの遺跡の調査、現地でのみ入手可能な文献資料の収集、を実施した。

## ４．研究成果

①『カエサル戦記集』として、カエサルの著作である『ガリア戦記』と『内乱記』、著者不明の三作品『アレクサンドリア戦記』『アフリカ戦記』『ヒスパーニア戦記』の邦訳を刊行した（〔図書〕の項参照）。

このうち、とくに著者不明の三作品はポンペイウスの死後からカエサルによる覇権確立に至る内乱の経過を記録した重要な著作であるにもかかわらず、これまで未邦訳であったので、その刊行は史料整備の点で大きな成果である。

また、邦訳の過程で『内乱記』において、ローマ人の誇りと自負の拠り所である「威信(dignitas)」とローマ人のアイデンティティーとも言うべき「自由の擁護」が作品のキーワードとして機能していること、カエサルがこれらを戦争の大義に掲げることで、言ってみれば、「われわれローマ人」のための戦いを主張する一方で、敵対するポンペイウス軍にはそれと対蹠的な「蛮族」のイメージが付与されることが観察され、このことは作品を貫く構想として解説に示された。

他方、著者不明の三作品の解説では、カエサルの著作に見られるような一貫した作品構想が欠けている一方、ポンペイウス派を「蛮族」として扱う点に共通性が見られることを指摘した。

② ウェルギリウス『アエネーイス』に表現されたローマ人が目指すものと、それを達成するために必然的に直面する諸問題をめぐって、いくつかの論考を発表した。

「葬礼」のモチーフを検討した論考（〔雑誌論文〕①）では、まず、「葬礼」が「永遠のローマ」の理念と関連していることを指摘した。「永遠のローマ」は、異なる才能を有する人々が共時的のみならず、世代を超えて通時的に協働し、いつか必ず訪れる国家存亡の危機をも克服して、未来を切り拓き続けるという理念であり、従って、そこでは先人の記憶を留め、遺志を引き継ぐことが重要な意味をもつ。この点で、「葬礼」はそうした遺志継承の結節点をなしていることが観察された。次いで、「葬礼」が結末場面においても暗示的に織り込まれていることが指摘され、そこでは、しかしながら、死の絶対性、および、これと対比的に未来の不可知性の表

現に与ることで、遺志継承に対する危機、個人の力の限界性を示唆していることが論じられた。この解釈は、これまで十分に認識されてこなかった「葬礼」の重要性を指摘したことに加え、作品中もっとも議論の多い結末場面に新たな解釈を提起した点で意義がある。

この論考とすでに公表ずみの「非情」および「運(fortuna)」のモチーフをめぐる論考の主要部分を統合することにより、結末場面に対して再考を試みる論考が英文で公表された（〔雑誌論文〕②)。主人公である英雄アエネーアースも含めて人間には不可避である知の限界性が「非情」と「運」のモチーフを通じて「誤解」ないし「思惑違い」として表現されているという観察から、この表現が「葬礼」に示される未来の不可知性と連動していることが論じられた。

主人公アエネーアースの宿敵であるトゥルヌスの妹ユートゥルナの作中での役割と機能を検討した論考（〔雑誌論文〕④）は、ユートゥルナが神々を含めた主要登場人物すべてと直接的な交渉をもつという特徴に着目し、主要登場人物との類似と対比を通じて、これらの人物の考え方や行動規範における相違とそこから生じるジレンマを鮮明に浮き上がらせていることを指摘した。とりわけ、指導者として敵対者も含めた多様な人々と多様な関係を結び、それぞれにもっとも適切な対処を求められるアエネーアースと、ただ一人兄トゥルヌスのみを大切にするユートゥルナとのあいだには公的立場と個人的立場の超えがたい溝が見て取れること、ひいては、それが作品の主題である「ローマ建国」の困難さに通じていることを論じた。

③ カエサルの著作にカエサル自身を理想的なローマの指導者として描き出す意図があったとすると、その理想像がアウグストゥス期の作家にどのように取り込まれたかについて、ウェルギリウスとオウィディウスそれぞれの「噂」の描写を例として考察した（〔雑誌論文〕⑤、〔学会発表〕②)。この論考では、まず、カエサルが噂の曖昧性、虚偽性、そして、尾鰭をつけて広がる増殖性をよく認識し、戦争の先触れ、戦局への影響、情報戦略のツール、将兵への心理作用といった噂の働きを頻繁かつ微細に記述したこと、そのうえで、ときに運の作用とも相まって制御不能とも思われる力を発揮する噂に対して、カエサルがつねに適切な対処と巧妙な操作を施せる指揮官として自身を表現していることを観察した。次いで、ウェルギリウスが描いた怪物としての「噂」(『アエネーイス』第 4 歌）は、カエサルが記述した噂の働きを取り込みつつ、戦争そのものの狂気と災いを体現しながら、噂に惑わされて誤った判断に陥る皮肉な状況と、どれほど賢明で慧眼でも限定的な知しかもちえない人間にはそうした誤りが不可避であることを暗示しているという解釈が提起された。カエサルが噂の記述を通じて理想的な指揮官像を提示しようとしたとすれば、ウェルギリウスは個人の力の限界とそのために生じる災厄に目を向けたと考えられる。対して、オウィディウスの「噂」(『変身物語』第 12 巻）は、カエサルの記述とウェルギリウスの描写を踏まえ、同じように戦争における噂の働きを取り込みながら、物語伝承を体現していることが論じられた。「噂」が語る戦争の物語は、言ってみれば、お茶の間で戦場にいるのと同等の緊迫感を味わわせてくれるのであり、そこに「ローマの平和」の寵児とも言うべきオウィディウスのユーモアが存分に発揮されていることが観察された。従来、明確な関連が見出されていなかったウェルギリウスとオウィディウスの「噂」の描写のあいだに「戦争」というリンクを指摘したうえで、それぞれに独自の表現を読みとった点にこの論考の意義がある。

④ ホラーティウス『書簡詩』の邦訳注解

を完成させ、2017 年秋に刊行を予定している。邦訳作業を通じて、ローマ社会の人間関係の間合いをはかる「適正」の徳が作品の核をなし、それがアウグストゥスを含めた多様な名宛人に向けた書簡形式の上にホラーティウス特有の機知をもって表現されていることを観察し、そのことは解説に記された。

⑤ Center for Hellenic Studies (Washington, D. C.)での研修（2014 年 5 月 14 日～5 月 28 日）、および、イタリア、バーコリで開催された国際シンポジウム参加（2014 年 6 月 25 日～28 日、〔学会発表〕①参照）などを通じて、ハーバード大学グレゴリー・ナジー教授、同大学リチャード・トーマス教授、テキサス A&M 大学クレイグ・カレンドルフ教授など著名な学者と交流を深めるとともに、資料文献収集を行った。

## ５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5　件）

① 高橋宏幸、『アエネーイス』における「葬礼」、フィロロギカ、査読有、８巻、2013、1-24.

② Hiroyuki Takahshi, Reconsidering the Final Scene of the Aeneid, Japan Studies in Classical Antiquity, 査読有、vol. 2, 2014, 103-121.

③ 高橋宏幸、馬を馴らす、文学、査読無、15 巻 1 号、2014、51-62.

④ 三田祐子、高橋宏幸、『アエネーイス』におけるユートゥルナの役割と機能、西洋古典論集、査読有、23 巻、2015、68-97.

⑤ Hiroyuki Takahashi, Rumor and War: From Caesar to the Aeneid and the Metamorphoses, Japan Studies in Classical Antiquity, 査読有、vol. 3, 2017, 116-142.

〔学会発表〕（計　2　件）

① Hiroyuki Takahashi, Translating the Aeneid into Japanese, Symposium Cumanum “Vergilian Translators”, The Vergilian Society, Villa Virgiliana (Bacoli, Italy), 2014 年 6 月 28 日。

② 高橋宏幸、噂と戦争：カエサルから『アエネーイス』、『変身物語』へ、日本西洋古典学会第 68 回大会、大阪大学、2016 年 6 月 5 日。

〔図書〕（計　3　件）

① 高橋宏幸、岩波書店、カエサル戦記集・ガリア戦記、2015、381.

② 高橋宏幸、岩波書店、カエサル戦記集・内乱記、2015、303.

③ 高橋宏幸、岩波書店、カエサル戦記集・アレクサンドリア戦記・アフリカ戦記・ヒスパーニア戦記、2016、266.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：

取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高橋 宏幸（TAKAHASHI, Hiroyuki）
京都大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号： ３０１８８０４９

(2)研究分担者

(3)連携研究者

(4)研究協力者
（　　）